

序 文

明治25年に開通した旧国鉄関西線は大阪と奈良を結び、人・物・文化を運ぶ大動脈として活躍するとともに、明治43年には久宝寺駅が、昭和13年には広大な面積の竜華操車場が建設され、その需要はますます増しました。

昭和61年には国鉄が民営化され、また高速自動車道路網が全国的に整備・拡充されてトラック輸送が増加するにつれ、鉄道輸送の需要が減少し、竜華操車場も廃止されました。

昭和61年7月には、地元八尾市から「竜華操車場跡地の基本構想」が提出され再開発事業が本格化されました。

久宝寺遺跡は、縄文時代から中世までの遺構・遺物が重層的に埋没しており、なかでも、弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺構面は豊富な内容を有しており、準構造船の一部が出土し、広く一般の人々にも周知された遺跡です。久宝寺遺跡にとって、現在竜華操車場跡地内で進められている各種都市機能更新事業は、昭和55年度から実施された近畿自動車道建設に伴う発掘調査以来となる、大規模な発掘調査の手が加えられる事となりました。これまでにも、6世紀中頃の横穴式石室が検出された七つ門古墳の調査や墳丘築造時にほぼ近い姿で検出され、割竹形木棺が完全な形で残っていた久宝寺1号墳の調査など数多くの新たな調査成果が得られています。

今回の調査は小規模なものでしたが、弥生時代後期後半の水田が良好な状態で検出され、重要な成果が加えられる事となりました。

こうした成果を得ることができたのも、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、都市基盤整備公団をはじめとする関係各位のご指導、ご協力の賜物と感謝しています。これからも当センターへのご支援を賜るよう切に希望します。

平成15年9月30日

財團法人 大阪府文化財調査研究センター

理事長 水野正好

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市龜井に所在する久宝寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪竜華都市拠点土地地区画整理事業（都市機能更新事業）の一環として計画された駅前広場防火水槽設置工事に先立ち、都市基盤整備公団から委託を受けて財團法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 調査は、調査部長玉井 功・調整課長赤木克祝・調整係長森屋直樹・中部調査事務所長藤田憲司（平成15年3月まで）・小野久隆（平成15年4月以降）の指示のもと、同所調査第二係長金光正裕が担当した。また、遺物の写真撮影は、中部調査事務所主査片山彰一が行なった。
4. 現地における調査は平成15年3月3日から平成15年4月30日の間実施し、引き続き中部調査事務所において平成15年5月31日まで整理事業を実施、平成15年9月30日の本報告書の刊行をもって全ての事業を終了した。
5. 現地調査・整理事業には下記の諸氏の指導・協力を賜った。記して感謝の意を表したい。
＜調査指導＞松岡良憲・阪田育功（大阪府教育委員会）、
＜現地調査・整理事業＞上河善子、高畑光昭、内田 充、林 聰、平瀬正明、
青山由美子、川崎理恵、今田明子、藤井文子
6. 本書の執筆・編集は金光が担当した。
7. 本調査で記録した写真・図面及び出土遺物は、当センター中部調査事務所で保管している。

凡　　例

1. 標高は、東京湾平均海面水位（T.P.）からのプラス値で、単位はmである。
2. 地区割り・方位は日本測地系の国土地図第VI系を基準とした。単位はmで、本文・図中では単位を省略した。
3. 土色の表記は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』第20版（1997）を使用した。

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
I 位置と環境	1
(1) 周辺の遺跡	1
(2) 龍華地区の主要な調査成果	2
II 調査に至る経緯と調査の方法	5
(1) 調査に至る経緯と経過	5
(2) 調査の方法	5
III 調査の成果	6
(1) 基本層序	6
(2) 遺構と遺物	7
IV まとめ	10

挿 図 目 次

図 1 周辺の遺跡	3
図 2 龍華地区内の主要な調査地（縮尺任意）	4
図 3 地区割り図（第IV・第V区画）	5
図 4 トレンチ西壁土層断面図（垂直1/40, 水平1/100）	6
図 5 第2面全体図（1/200）	8
図 6 第3面全体図（1/200）	8
図 7 第4面全体図（1/200）	8
図 8 4溝・5溝断面図（1/40）	9
図 9 第5面全体図（1/200）	9
図10 畦畔出土土器実測図（1/3）	9
図11 第7面全体図（1/200）	10
図12 00-1・2地区水田面全体図（縮尺任意）	10

写真図版目次

図版一	13
1. (上) レンチ西壁断面南側 (第1層～第4層)		
(下) レンチ西壁断面北側 (第1層～第4層)		
2. 第2面全景 (垂直写真)		
3. (上) レンチ西壁断面南側 (第5層～第7層)		
(下) 第3面 4溝 (北西から)		
4. 第5面全景 (垂直写真)		
図版二	14
1. (上) レンチ西壁断面北側 (第3層～第4層)		
(下) 第5面水田全景 (南から)		
2. (上) 第5面水田畦畔検出状況		
(下) 第5面水田全景 (北から)		
3. (上) 第5面水田畦畔土器出土状況		
(下) 第8面北半部全景 (南西から)		
4. 第5面水田畦畔出土土器		

I 位置と環境

(1) 周辺の遺跡

久宝寺遺跡は、八尾市久宝寺・亀井・渋川を中心に南北1.6km 東西1.7kmの広範囲に及ぶ、縄文時代晚期から中世までの複合遺跡である。遺跡は、三角州帯 I a に地形分類される地域に位置する(高橋1991 1995)。周辺には美園遺跡・佐堂遺跡・加美遺跡・亀井遺跡・竹渕遺跡・跡部遺跡・成法寺遺跡・矢作遺跡・植松遺跡などが分布している。

縄文時代 上町台地・瓜破台地・生駒山地西麓域には、森の宮遺跡・長原遺跡・馬場川遺跡・繩手遺跡などの遺跡が分布している。三角州帯の低地部では、河川や包含層から糞の圧痕や煤が付着した後期・晚期の土器が出土しているが、住居址や土坑といった具体的な遺構が検出された例は少ない。

弥生時代 前期には、長原遺跡・田井中遺跡・水足遺跡・鬼虎川遺跡・鬼塚遺跡の他、低地部でも三角州や自然堤防などの微高地上に、若江北遺跡・山賀遺跡・美園遺跡などの諸遺跡が形成される。そして、若江北遺跡・山賀遺跡・瓜生堂遺跡・志紀遺跡では水田が検出され、池島・福万寺遺跡の水田からは、両側に堤を築いた幅5~7mの人工の直線水路が300m以上にわたって検出されている。近年、突堤紋土器と速賀川系土器が共伴する良好な事例が増加し、河内平野における弥生文化定着の過程が明らかになりつつある。中期には、瓜生堂遺跡・鬼虎川遺跡・亀井遺跡など拠点的な集落を核とするネットワーク社会が成熟期を迎える。瓜生堂遺跡や加美遺跡では大規模な墳丘墓が築造されている。低地部の遺跡では中期の遺構面を厚い洪水砂が覆う事例が多くみられ、亀井遺跡では後期後半には集落の規模が著しく縮小する。また、後期後半の方形周溝墓も巨摩遺跡・喜連東遺跡・長原遺跡で検出されている程度で、具体的内容は不明な点が多い。

古墳時代 弥生時代終末から古墳時代初頭には遺跡数が再び急増する。西岩田遺跡・瓜生堂遺跡・美園遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡・中田遺跡などである。これらの遺跡からは、韓式系土器や吉備・播磨・阿波・山陰の各地方の土器が出土し、他地域との交流が活発であったことが窺える。中田遺跡からは朝鮮半島南東部(嶺南地域)を起源とする軟質両耳土器や北九州に類例が多く見られる燐形土器が、東郷遺跡や萱振遺跡からは特殊器台など注目すべき遺物が出土している。加美遺跡では前方後方形1基を含む墳墓群や竪穴住居跡群が検出され、陶質土器や滑石製鏡・内行花文鏡・銅劍・銅鏡などが出土している。同時期の墳墓群や竪穴住居跡群が検出され、鹿尾や銅鏡が出土している久宝寺遺跡との関連が注目される遺跡である。前期には、友井東遺跡・佐堂遺跡・田井中遺跡などでも集落が形成され、低地部でも前方後方墳(久宝寺古墳)や萱振1号墳(4世紀後半)・美園古墳(4世紀末)などの方墳が築造されている。亀井遺跡からは、亀井古墳(5世紀中期末の方墳)を利用し、敷葉工法で築かれた大規模な堤防が検出された。敷葉に利用された植物遺体の分析から堤は7月から10月の間に構築されたとする興味深い調査結果が得られている。中期以降、瓜破台地上の長原遺跡・城山遺跡では古墳群が6世紀中頃まで造営されるが、低地部でも七ツ門古墳(6世紀中頃)・山賀古墳(6世紀中頃)・巨摩古墳(5世紀末)・友井東古墳(5世紀後半)などの方墳が検出されている。中期から後期には竹渕遺跡・萱振遺跡・山賀遺跡・友井東遺跡・佐堂遺跡・小阪合遺跡・矢作遺跡などの集落遺跡が知られるが、比較的小規模で継続期間も短い。

古代 7世紀初頭には古市大溝の開削を始めとする大規模な開発が展開され、白雉元年(650)には前期難波宮の造営が開始される。瓜破遺跡・瓜破北遺跡や長原遺跡西部では一般集落とは異なる溝や柵で方形に区画された大型の掘立柱建物群が出現している。当地域一帯は河内国淡川郡跡部郷に属し、周辺には、淡川庵寺(淡川郡)・竜華寺跡(淡川郡)・西郡庵寺(若江郡)・東郷庵寺跡(若江郡)・弓削庵寺(若江郡)・瓜破庵寺(丹北郡)・加美鞍作庵寺などの古代寺院が点在する。東郷庵寺跡に近接する小阪合遺跡では、綠釉陶器・多数の皇朝鏡・銅製巡方・黒色土器B類の風字硯など注目すべき遺物が多数出土している。長原遺跡・城山遺跡では条里地割に一致する7世紀の水田が広範囲にわたって検出され、以後周辺地域では洪水による廃絶・再開発を繰り返しながら生産域の拡大・維持が計られており、平安時代には溝で区画された約半町四方の聚落地が出現している。この時期低地部でも久宝寺遺跡・太子堂遺跡・萱振遺跡・中田遺跡などで遺構が検出されているが大規模な集落は少ないが、久宝寺遺跡や佐堂遺跡では条里地割に一致する10世紀初頭の水田が検出されており、低地部でも水田開発が広範囲に行なわれていた事が明らかになりつつある。

中世以降 萱振遺跡・小阪合遺跡・植松遺跡・欠作遺跡などで集落遺構が、佐堂遺跡では旧長瀬川に設けられた13世紀の堰岸施設が検出され、室町から戦国時代の動乱期には西証寺(現願証寺)を中心とする久宝寺寺内町が形成されている。宝永元年(1704)の大和川の付け替え後、洪水の被害が少なくなった河内平野には「島畑」と呼ばれる耕地形態が急激に拡大し、近郊の集落では商品作物の生産が盛んとなり、特に「河内木綿」は全国に知られた。

(2) 竜華地区での主な調査成果

昭和61年7月に「竜華操車場跡地の基本構想」が八尾市から発表され、竜華地区の再開発事業が具体化される。最初の調査は昭和63年度八尾市教育委員会による試掘調査であった(63-269)。その後平成2年度からは(財)八尾市文化財調査研究会が調査に着手し、平成7年度からは当センターも調査を開始した。

センターが実施した最初の調査は、新線路予定地内での試掘調査(95-1~7)とJR新駅舎・自由通路建設に伴う調査(95-8・9)である。その後、平成8年度には、一般府道住吉八尾線付け替えに伴う調査(96-1、97-1、98-1・2)を実施している。平成10年度には都市計画道路竜華東西線建設に伴う調査(99-1~5)に着手し、平成13年度にも竜華東西線(その2)として2箇所の調査を行なった。平成13年度には多目的広場施設建設に伴う調査(00-1・2)と大阪府東部流域下水道竜華水環境保全センター水処理施設建設に伴う調査(水処理施設)に着手し、水処理施設の調査は平成15年度も継続調査されている。

竜華地区では、操車場建設に伴う盛土・現耕土を除去した面(概ねT.P.+8.0mから8.5m)から調査が開始され、最も深く及んだ地点ではT.P.+3.8mにまで達している。

弥生時代前期の遺構面が確認されているのは、水処理施設を中心とする竜華地区の西半部である。00-1・2、水処理施設、竜華東西線(その2)の各調査区では、ピット・土坑・溝が検出され、特に東西線の東側調査区からは幅6.7mを最大とする南北方向の溝4条が検出された。また、竜華地区東端の小阪合立抗調査区ではT.P.+4.0mで河川が検出されている。竜華地区では前期の遺構面は、T.P.+5.0m~T.P.+4.0mに埋没している事が明らかとなった。

弥生時代中期には、当地一帯は生産域としての土地利用がなされており、水処理施設、00-1・2、98-



- | | | | | | |
|------------|------------|-----------|--------------|-----------|--------------|
| 1. 久宝寺遺跡 | 2. 久宝寺内町 | 3. 津川庵跡 | 4. 錦池遺跡 | 5. 北島遺跡 | 6. 五合田遺跡 |
| 7. 段上山遺跡 | 8. 朝手遺跡 | 9. 上方守道跡 | 10. 泊瀬・鶴谷寺遺跡 | 11. 美濃川道跡 | 12. 英吉寺遺跡 |
| 13. 大穴道跡 | 14. 大光寺山遺跡 | 15. 太田川道跡 | 16. 大竹道跡 | 17. 水谷道跡 | 18. 郡川道跡 |
| 19. 星雲寺跡 | 20. 神宮寺道跡 | 21. 平野路跡 | 22. 大穴道跡 | 23. 大森南道跡 | 24. 太平寺道跡 |
| 20. 安土道跡 | 26. 高井田遺跡 | 27. 西山道跡 | 28. 若田道跡 | 29. 丘上寺道跡 | 30. 四日堂道跡 |
| 31. 小坂山道跡 | 32. 若江北道跡 | 33. 若江道跡 | 34. 小若江道跡 | 35. 山原道跡 | 36. 玉串道跡 |
| 37. 西郡寺道跡 | 38. 西福寺道跡 | 39. 友井東道跡 | 40. 黄金道跡 | 41. 荘屋道跡 | 42. 佐庄道跡 |
| 43. 大丸寺道跡 | 44. 宮町道跡 | 45. 東郷寺道跡 | 46. 東郷寺道跡 | 47. 武藏寺道跡 | 48. 小坂谷道跡 |
| 49. 鹿籠寺跡 | 50. 矢作道跡 | 51. 中田道跡 | 52. 東川口道跡 | 53. 月見寺道跡 | 54. 宮下道跡 |
| 55. 西福寺道跡 | 56. 衣掛道跡 | 57. 筑乃川道跡 | 58. 加北北道跡 | 59. 加北道跡 | 60. 長楽寺守寺跡 |
| 61. 加美作守寺跡 | 62. 亀井北道跡 | 63. 亀井北道跡 | 64. 駒部道跡 | 65. 桜松道跡 | 66. 太子堂道跡 |
| 67. 老源道跡 | 68. 志紀道跡 | 69. 田井中道跡 | 70. 本の木道跡 | 71. 弓削道跡 | 72. 本郷道跡 |
| 73. 川北道路 | 74. 船橋道跡 | 75. 西上山道跡 | 76. 林道跡 | 77. 開岡寺道跡 | 78. 平野郡根深渓谷 |
| 75. 川西道跡 | 80. 宮道東道跡 | 81. 成城守寺跡 | 82. 瓜坂古寺跡 | 83. 瓜坂道跡 | 84. 長庶道跡+山田町 |
| 83. 八郎寺道跡 | 86. 太田道跡 | 87. 大正道跡 | 88. 北坂道跡 | | |

図1周辺の遺跡 国土地理院、平成10年12月発行の1:50000地形図「大阪東南部」の一部を使用

2、KH00-33の各調査区では良好な水田が検出されている。この他長吉立坑では中期前半の掘立柱建物・ピット・土坑が、KH99-29調査区西端で後期後半の溝・土坑・土器群など集落域を示唆する遺構が検出されているが遺構の密度は希薄である。

弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺構面は久宝寺遺跡で最も安定しており、厚い土壤化層が広範囲にわたって確認される。耕作に伴う小溝群・水田・堅穴住居址・墳墓群などがT.P.+6.0m～T.P.+6.2m前後の間で重層的に検出されている。墳墓群は墳丘を良好に留め、00-1・2調査区で検出された方墳は築造時に近い姿で検出された。現在竜華地区で検出された墳墓群は、センター調査地区だけでも約60基、竜華地区全体ではかなりの数の墳墓が存在していたと推定される。古墳時代前期には、水処理施設・東西線（その2）、KH99-29西半の各調査区では水田が、KH98-24の中央部からは幅100mの大規模な河川が検出されている。旧長瀬川の本流と推定されるこの河川からは、古墳時代中期の合掌型の堰が95-8・9、96-1、97-1調査区で検出されている。古墳時代中期・後期の遺構はこの河川より東側KH98-24、KII99-28、KII00-33の各調査区で検出されているが、遺構密度は低い。奈良時代後半にはKH99-29、KH00-33調査区で井戸・土坑・掘立柱建物などの遺構が検出され、この地域を中心とした居住域が推定されている。一方、竜華地区西半部では古代の遺構面が検出されるが後世の地形改變が著しく面の状況は良くない。水処理施設南西部や東西線（その2）調査区で掘立柱建物・井戸が散発的に検出される程度である。ただし、近世島畑の基底部には、古墳時代後期・古代の遺構面が耕作や洪水の影響を受ける事なく残っている場合があり、特に98-1調査区では、6世紀中頃の横穴式石室が検出されている。

〔参考文献〕

- 高橋 学 1991年3月 「河内平野の地形環境分析 I - 河内平野の環境分析に関する基礎的考察」
財團法人大阪文化財センター 1991年3月「池島・福万寺遺跡 発掘調査概要」
高橋 学 1995年3月 「臨海平野における地形環境の変貌と土地開発」 日下雅義編「古代の環境と考古学」 古今書院
財團法人 八尾市文化財調査研究会 2001年 「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書」
財團法人 八尾市文化財調査研究会 2003年 「久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書」
財團法人 大阪府文化財調査研究センター 1996年3月 「久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査報告書」
財團法人 大阪府文化財調査研究センター 1996年3月 「久宝寺遺跡・竜華地区（その1）発掘調査報告書」
財團法人 大阪府文化財調査研究センター 1998年3月 「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書II」
財團法人 大阪府文化財調査研究センター 2001年2月 「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書III」

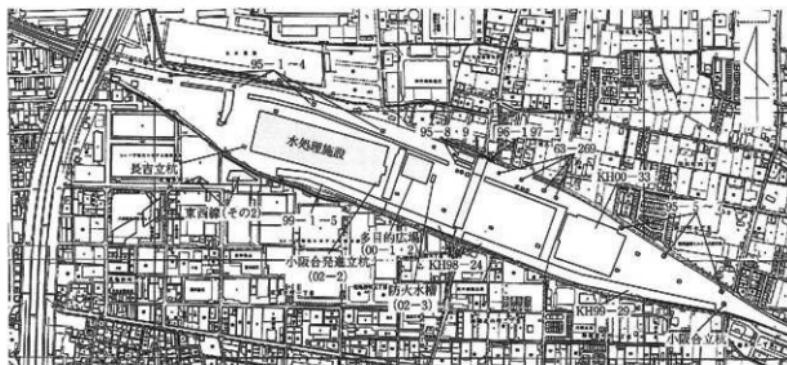


図2 竜華地区内の主要な調査地（縮尺任意）

II 調査に至る経緯と調査の方法

(1) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成13年度当センターが発掘調査を行った多目的広場(00-1・2)調査区の東約6mの地点、東西6.0m、南北15.6mの範囲である。防火水槽はT.P.+4.63mの深度に設置されるが、大阪府教育委員会とセンター並びに都市基盤整備公団3者の協議の結果、多目的広場の調査結果を受けて、T.P.+4.0mまで調査を行うこととした。

センターと都市基盤整備公団は、この結果を受けて平成15年2月28日付けで委託契約を締結、同年3月3日、調査に着手した。調査は、T.P.+5.0m前後で弥生時代前期の遺構面を調査した後さらに下層をT.P.+4.63mまで掘削したが、遺物の出土が全く認められず、また洪水層がさらに深くなる事が予想された為、下層の掘削について大阪府教育委員会と協議した。その結果、調査区中央部分でのトレンチ調査において状態を確認した後判断することとなった。この結果を受け約40cm程掘削した時点で、著しい湧水があった為再度大阪府教育委員会と協議した結果、以下の層については調査不要と判断されたため、調査を終了した。

(2) 調査の方法

調査区名称は、調査年度と調査順序を示した「02-3」と呼称した。平成14年4月から測量法の改正に伴い測量基準が世界測地系に変更された。しかし、久宝寺遺跡では、これまでの調査成果との整合性を保つ為、従来の日本測地系を基準とした地区割りが用いられており、今回も従来の方針に従った地区割りを設定した。測量は、クレーンを用いた空中写真測量を委託し、3級基準点2点と4級水準測量を行い、1/50と1/100の遺構図・平面図を作成した。方位は、日本測地系第VI系座標北を用いた。磁北より東へ6°40'、真北より0°14'西に振れる。土層観察用の畦はトレンチ西側に設定し、その他に、排水を兼ねて鋼矢板際に掘削した溝の断面を観察し、必要な部分については図面を作成した。図面以外にも、35mmカメラと6×7カメラによるモノクロとカラーリバーサル撮影を行った。遺構番号は、検出順に通しの番号を付し、その後に遺構の種類を付した。出土遺物は、層位・遺構ごとに取上げ登録・洗浄・注記の後、選別・分類を行い、可能なものについては復原・実測・写真撮影を行い本書に掲載した。



III 調査の成果

(1) 基本層序

今回の調査地点は、東側約60mで検出された旧長瀬川の本流とも考えられる古墳時代前期から中期前半の河川の左岸部にあたり、この河川からの土砂の供給を受けやすい環境にある。また、沖積地特有の複雑な地層が予想された。本調査では、人為的に形成された搅拌層、整地土層や風化作用・動植物等の分解作用によって母材の地層本来の構造が変形し、土壤化した層をa層、ラミナ構造が観察される層（主には水成堆積層を母材とする層）をb層として認識し、これを基準として土層を分層した。

第1層 烟島間の作土層で極細砂・中砂を多く含むシルト層で細分される。近世瓦・染付けなどの細片を若干含む。

第2層 マンガン斑や鉄分が沈着し、細砂・中砂を含む暗灰黄色シルトのa層と植物遺体の薄層を挟むするシルト・極細砂のラミナが発達したb層で構成される。a層は厚層約30cmで2層に細分される。b層のラミナはほぼ水平方向で、厚層は20~30cm。

第3層 灰白色極細砂や径2~4cmのシルトブロックを含む暗灰黄色粘土質シルトのa層とb層で構成される。a層上面はT.P.+6.9m。北半部では層厚3~4cmの土壤化層が数枚確認されるがいずれも土壤化は弱く連続性に欠ける。b層上部は中砂が主体で下部は粒径も細かく、シルトから粘土に暫移的に変化する。最下部は未分解の植物遺体を多く含む粘土層で第2面を覆う。遺物の出土は認められない。

10

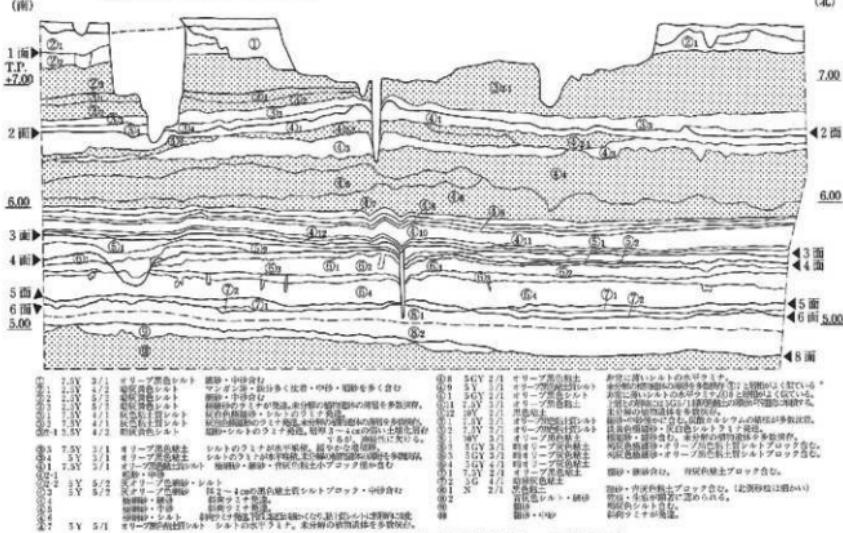


図4 トレンチ西壁上層断面図(垂直1/40、水平1/100)

- 第4層 T.P.+5.7~6.7mの間に堆積する厚い洪水層で、中央部に南北方向の微高地を形成する。細砂・粘土質シルトのブロックを含む粘土質シルトのa層と中砂・粗砂を主体とするb層の2層に大別される。b層の上部は斜交ラミナが特に発達している。下部は、緑灰色粘土と未分解の植物遺体の薄層を多く含むオリーブ黒色粘土質シルトの薄層が重層的に堆積し第3面を覆う。遺物は全く出土しなかったが、周辺調査区の所見から、古墳時代初頭から中期前半の洪水層と考えられる。
- 第5層 極細砂を含むオリーブ黒色粘土質シルトを主体とするa層と中砂・細砂・シルトのb層で構成される。全体に層厚は薄い。a層には炭酸カルシウムの結核が多く沈着する。b層には未分解の植物遺体の薄層を多く挟在する。
- 第6層 細砂・シルトブロックを含むオリーブ黒色粘土質シルトのa層とb層で構成され、a層はさらに2ないし3層に细分が可能である。全体の層厚は30~40cm。b層は暗オリーブ灰色シルトを主体とし第5面を覆う。水平方向のシルトの細かなラミナが観察される。土器の細片が数片出土しているが、時期は特定できない。
- 第7層 細砂・極細砂を含む黒色粘土質シルトのa層とb層で構成される。a層は平均5~7cmと薄い。b層は5Y4/1粘土質シルトの薄層が堆積する。a層上面はT.P.+5.3m前後で全体に平坦な面である。
- 第8層 青灰色シルトを主体とする。層厚は南端で20cm、北に向かって層厚を増し北端で40cm。上部は土壤化が進行し、中砂・粗砂・青灰色粘土ブロックを含む黒色を呈する。下部b層との層界は不明瞭である。乾痕・生痕が多数確認される。a層上面はT.P.+5.2~5.0mにある。
- 第9層 暗灰色粘土質シルトブロックを含む粗砂のa層である。調査区南半部のみで確認された。土壤化はかなり進んでいたが遺構・遺物は全く出土しなかった。
- 第10層 粗砂・中砂・細砂・シルトのラミナが発達した洪水層である。上面はT.P.+4.7~5.0mで確認しているが湧水が著しく全てを掘削できていない。遺物の出土は全く認められなかった。

(2) 遺構と遺物

T.P.+7.5mから最終調査面までの間に計8面の遺構面を検出した。層中には不連続な弱い土壤化層が何枚か確認されたが、竈華操車場関連施設等の搅乱によって層の連続が断たれたり、面の大半が失われたことによって、面として調査できなかつた部分もあった。機械掘削終了後、南端では、②層をベースに構築された基底部幅約3.7m 高さ約30cmの東西方向の島畠が検出された。

1 第1面（古代）

南端の島畠の中でのみ確認された②層を除去した面を第1面とする。北端では現耕土を除去した面に対応する。T.P.+7.3m前後にある平坦な面である。南東隅で南北方向の幅0.3m 深さ10cmの溝が検出された。遺構からは土師器の細片が出土している。土師器・須恵器・陶磁器・須恵器の細片が出土しているが、時期を特定するまでには至らない。瓦器・近世陶磁器類の出土がない事から、古代の面と推定される。

2 第2面（古墳時代中期以降）

未分解の植物遺体を多く含む暗灰黄色粘土層③₃・③₂層を除去した面である。ベースとなる④₁層は、層厚10cm前後で有機物もあまり含まれない。中央部が南北方向にやや高く、南と北へ向かって緩やかに下降している。T.P.+6.5~6.7m前後である。高い部分で幅0.6m、深さ8cm、断面U字形の浅い南北方向の2溝を検出した。溝の埋土は極わずかに細砂を含む暗灰色粘土質シルトの1層のみで、遺物の出土はない。北側では高さ3~5cm、基底部幅80cmの3畦畔状の高まりが検出され、水田の可能性が想定された。2溝と3畦畔状高まりの間には未分解の植物遺体や細砂ブロックを含む粘土質シルトが堆積する不定形な落ち込みが検出され、その状態が不安定であることや、2溝より南側では畦畔が検出されなかったことから、少なくとも調査区内に水田が存在した可能性は極めて低い。遺物は全く出土しなかった。2面以下にも土壤化層が認められたが面として検出できなかった。ベースとなる4₁層は、古墳時代中期前半以前の洪水層に対応する蓋然性が高く、第2面は、古墳時代中期以降に形成された面と考えられる。

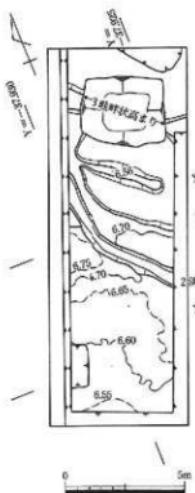


図5 第2面全体図 (1/200)

3 第3面・第4面（古墳時代初頭～古墳時代前期）

第3面は、第4層の洪水層を除去した面である。T.P.+5.7m前後で南側が最も高く北に向かって低くなる。極細砂を含むオリーブ黒色粘土質シルトをベースとする。南端部で両側に小堤を伴う東西方向の4溝を検出した。4溝は、深さ6cmの浅い皿状を呈し、溝底および周辺には粗砂・細砂を埋土とする不定

形な踏み込み痕跡が検出される。小堤は高さ5~8cm、立ち上がりはルーズで明確ではない。堤中に細砂・シルトの小ブロックが若干含まれる。周辺の平坦部にはヨシの根が多数見られ、湿地状態にあった事が窺える。第4面は、第3面のベース層を除去した面で検出された。T.P.+5.5m前後で、第3面に比して比較的平坦な面である。第3面で検出された4溝とほぼ同じ位置で5溝が検出された。幅0.7~1.0m、深さ10cmの断面U字形の溝で、調査区外へ続く。溝中には、細砂・中砂・シルトが堆積し、溝の北肩部にはシルト・細砂のラミナ層が堆積していた。ベースとなる粘土層上部には炭酸カルシウムの結

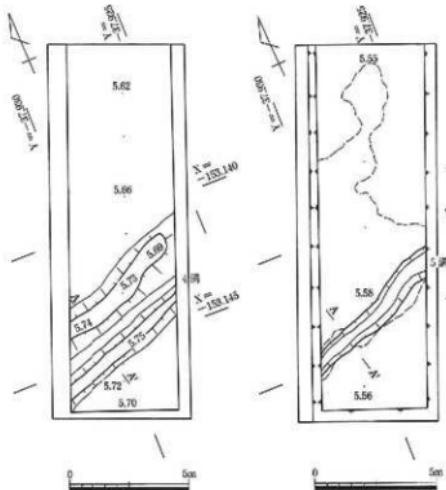


図6 第3面全体図 (1/200)

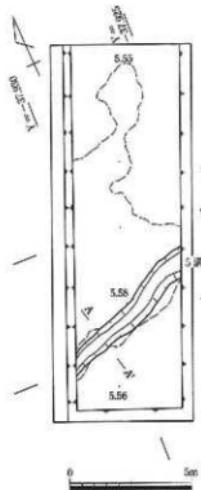


図7 第4面全体図 (1/200)

核の沈着が多数みられ、第3面と同様の立地環境にあったと思われる。第4面から第3面へは検出された遺構や堆積状況から、比較的短期間のうち変化したものと推定される。

4. 第5面（弥生時代後期後半）

第5面は、⑥層の暗オリーブ黒色粘土層をベースとし、T.P. +5.2m前後にある平坦な面である。暗灰黄色の薄い粘土層が全面を覆う。6枚の田面と畦畔を検出した。作土層は、南半部では極細砂・細砂を含み、中央から北半にかけては砂粒の量が少なくシルト質となる。

全体形状が推測される中央の水田は、8m×5.5m 推定面積44m²の長方形の区画である。畦畔は基底部で幅50cm、高さ2~3cmで、径10~15mmの黒褐色粘土のブロックを含む。北東隅の畦畔の中から横位の状態でほぼ完形の甕が出土した。図11は、弥生時代後期後半の小型の甕である。器高13.6cm、口径12.8cm、底径3.9cm。外面には煤が厚く付着し、赤く変色した個所や器壁が剝落している個所が見受けられる。体部内面は縦方向のナデ調整を施す。

5. 第6面・7面（弥生時代前期）

これまでの調査で弥生時代前期とされていた面に相当する。T.P.+5.0~5.2m前後の緩やかに北に傾斜する平坦な面である。粗砂・中砂を含み土壤化したa層とb層で構成されるが、その層界は不明瞭である。土壤化層上面を第6面、土壤化層を除去した面を第7面とした。第5面と第6面の間には、暗緑灰色粘土層が堆積しているが、層厚は非常に薄い。第6面は青灰色粘土の小ブロックの混入や乾燥痕が認められた程度で遺構は検出されなかった。第7面からは、南半部でピットが検出された。6・8ピットは径20cm、深さ5cmで、埋土はいずれも第6面ベースの細砂・青灰色粘土の小ブロックを含む黒色粘土質シルトである。7ピットは径40~70cm、深さ15cmの平面不定形な形状で、細砂を若干含む暗オリーブ灰色粘土である。いずれのピットからも遺物の出土は認められなかった。第6面・7面を形成する青灰色粘土質シルト層は北に向かって層厚を増す。また断面でも生痕・乾痕が顕著に認められた。

6. 第8面（弥生時代前期以前）

第8層を除去した面である。⑨・⑩層をベースとし、北に向かってかなり下がる。南端でT.P.+5.0m、北端でT.P.+4.6m。南半部でのみ粗砂を主体とする土壤化層の堆積が認められた。母材となる粗砂の堆積も南半部に限られる。遺構・遺物は全く出土しなかった。



図8 4溝・5溝断面図(1/40)

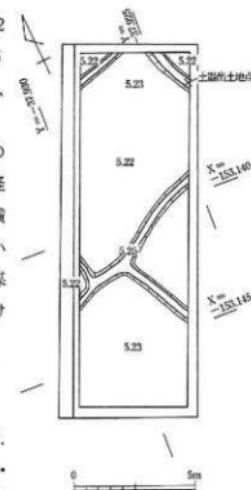


図9 第5面全体図(1/200)

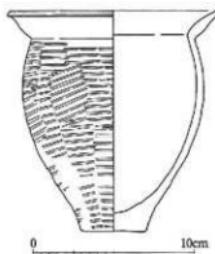


図10 畦畔出土土器実測図(1/3)

IV まとめ

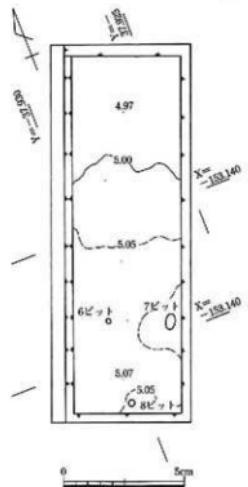


図11 第7面全体図 (1/200)

検出された各遺構面の帰属時期を決定するにあたっては、出土遺物が少なく周辺調査地での成果を参考とした。

今回検出された弥生時代前期面はT.P.+5.2mで、西側00-1・2調査区の面とほぼ同じ高さにある。竜華地区で検出されている前期面の高さを比較すると、約400m西側の東西線（その2）調査区の面はT.P.+4.0m、水処理施設東端部では、T.P.+4.9mである。東側約60m地点の98-1・2調査区では、T.P.+3.1~3.5mの間に中期以前の3枚の土壤化層が確認されており、東側へは急激に下降して後背湿地へ続くと考えられる。竜華地区西半の前期面は、今回調査地点付近を最高所とする自然堤防と、西側へ向かって緩やかに傾斜する後背低地に立地していると判断される。今回、遺構・遺物がほとんど検出されなかつたのもこうした地形環境を反映して、積極的な土地利用がなされなかつたことによるものと思われる。

竜華地区で弥生時代後期の水田が検出されているのは、00-1・2調査区である。今回検出された後期水田は、検出高から00-1・2地区の第5-2面水田に対応させるのが妥当と考えられる。これより東側の98-2調査区では、T.P.+4.7~5.1mで中期（III~IV様式）の水田が検出されている。この水田とは、得られた時期が異なるが、検出高が近接し、水田の形状も似ている

事から、同一水田の可能性も考えられる。各水田の地形環境や堆積状況を含めた形成・廃絶時期の検討が必要と思われる。

久宝寺遺跡の中で最も内容が豊富で、安定している弥生時代終末~古墳時代初頭の面が今回の調査区でも確認された。しかし、積極的な土地利用を示す遺構が検出されなかつたことから、西側の墓域・集落域・生産域の東限に位置すると考えられる。

今回の調査地点は、弥生時代前期から古墳時代初頭を通じて竜華地区西半部遺構群の東限にあたっており、これは縄文時代晩期以前に形成された地形環境が大きく影響しているものと思われる。

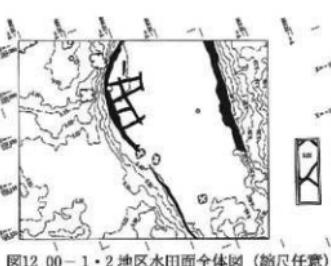
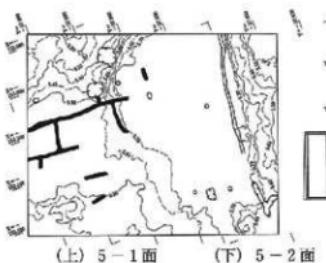
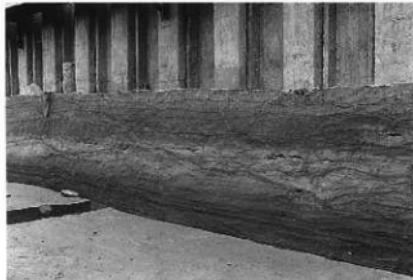


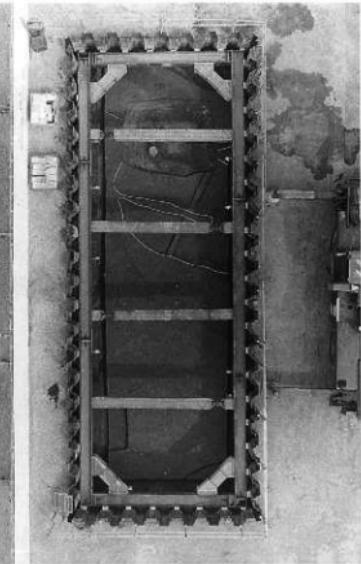
図12 00-1・2地区水田面全体図 (縮尺任意)

図 版



1. (上) トレンチ西壁断面南側（第1層～第4層）

(下) トレンチ西壁断面北側（第1層～第4層）



2. 第2面全景（垂直写真）



3. (上) トレンチ西壁断面南側（第5層～第7層）

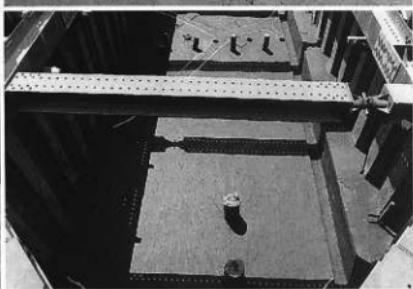
(下) 第3面 4溝（北西から）



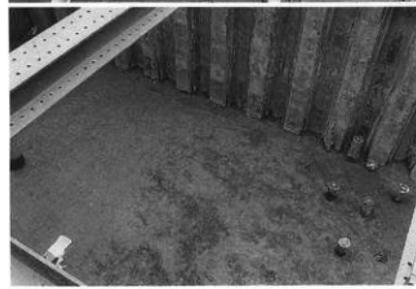
4. 第5面全景（垂直写真）



1. (上) トレンチ西壁断面北側（第3～第4層）
(下) 第5面水田全景（南から）



2. (上) 第5面水田畦畔検出状況
(下) 第5面水田全景（北から）



3. (上) 第5面水田畦畔土器出土状況
(下) 第8西北部全景（南西から）



4. 第5面水田畦畔出土土器

報告書抄録

ふりがな	きゅうほうじいせき・りゅうげちくはくつちょうさほうこくしょIV
書名	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書IV
副書名	大阪竜華都市拠点地区駅前広場防火水槽設置工事に伴う発掘調査
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第102集
編著者名	金光正裕
編集機関	(財)大阪府文化財センター
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 TEL 072-299-8791
発行年月日	2003年9月30日

所収遺跡	所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号				
久宝寺遺跡	大阪府八尾市龜井 地内	27212	23	北緯 34°37'08" 東経 135°35'11"	2003.3.3 ～ 2003.4.30	93	駅前広場防火 水槽設置
所収遺跡名		種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
久宝寺遺跡		生産	弥生	水田		弥生時代後期型	



(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第102集

久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書IV

大阪毛利都市拠点地区駅前広場防火水槽設置工事に伴う発掘調査

発行年月日 2003年9月30日

編集・発行 財団法人大阪府文化財センター
大阪府堺市竹城台3丁21番4号

印刷・製本 銀じんのう
